

ふたり

有佐
隆

それはひどく愚かで、とても尊ふたりび二つの命はなし

それは高い塔の上に住んでいる、あるお姫様の物語です。

金砂をこぼしたような黄金の髪、

細く白い手足は白百合を連想させ、

瞳は青宝玉サファイアのように輝いています。

それは目にした誰もが心惹かれずにはられない、理想の具現のような少女でした。

しかし、少女が人の目に触れることはありません。

なぜなら彼女は高い高い塔に閉じ込められているから。

どうしてそうなったのか、いつまでそうなのかといったことは、もう考えることさえ忘れてしまいました。

ただ一つ幸いだったと言えるのは。

すべきことには事欠かなかったことぐらいですか。

深く大きいため息ひとつ。

大きな窓から差し込む金色の日差しの中、彼女は今日も今日とて、好きでもない歌をうたいながら、好きでもないはた織り機に向かい続けます。

その唇からこぼれ、その手から織り成されるのは、まるで彼女の美しさを写し取ったかのような作品ばかり。

しかし、当の本人はそんなものには目もくれず、歌うのにも飽きたようで、物憂げに黙り込んでしまいます。

ふと、思いついたように横の鏡に目を向けようと：

そのとき。

“娯楽しゅみに走るのもいいが、それで本業ほんしゅつを見失うのは感心しないな。”

どこからか声が聞こえました。

けれど、部屋のどこにもその主の姿などみえません。

彼女は別段不思議がることもなく、言葉を返します。

「自分のやりたいことをするのが、その人の本当じゃないのですか？ 退屈でつまらな

いことがどうして本質なのでしょう？」

「違うな。ほとんどの人間は自己生存の手段として、自らの望む行為など選択しないが、それが正しいし、なにより効率がいい。それで人間社会が維持されているのが証拠だ。各人が己が欲のみで動けば、人の文明は一年とたたずに崩壊するだろうね。」

相変わらずの理屈っぽい発言に、頭が痛くなります。

「そんなに窮屈なものなのですか？みんな楽しそうだけど。」

羨むように言って、少女は白い手で鏡に触れます。まるで愛しむように。

そこには、塔の外が映っていました。

これだけが、彼女と世界をつなぐ唯一の接点。

「こんなものの観察が、君にとってそこまで楽しいものなのか？」

力強い頷き。

「だって、すごいことです！人も草木も空も、変わらないものは一つもない！こんな代わり映えしない、狭い部屋とは大違いです。」

相手は呆れとも、諦めともつかない声で、

「全て無意味で怠惰な繰り返しだと、私は思うけどね。君が創る織物や歌のほうがよっぽど存在理由がある。」

声は半ば真剣な口調になって続けます。

「君の織る布は鑑賞角度を一度ずらすだけで、全く別種の感動をもたらすし、君の歌は圏外の神秘を含んだ純真なものだ。これ程の作品を生み出す君が、別のものを求める理由が何処にある。」

今度は、彼女が呆れます。

「あんなものわたしの歌をそんな風に考えるのですか。なんだか妙な気分です。」

声はむつとしたようで、

「思考し、分析・解析するのは、人間に付属した中でも数少ない有意義で優れた技能だ。それを否定するのなら、君は私にとって嫌悪対象となってしまう。」

「そう、わたしはあなたみたいな堅物の人、割と好きですけど。」

ポツリとした眩き。

訪れる一瞬の静寂に、少女は久々の優悦に浸ります。

だって、声かれが押し黙ってしまうということは。

彼女が一本取ったということなのですから。

煌々と、輝く月。

照らし出される、背丈の高い草の群れ。

その中を、彼と彼女が駆けてくる。
飛ぶように。踊るように。

例えるならば、戯れ遊ぶ二羽の小鳥か。

月が、草原が、夜が。

二人を包む世界の全てが、その小さな幸福を祝福するよう。

やがて二人は立ち止まる。

月光が照明装置スポットライトのように、その姿を浮かび上がらせ。

影と影が近づいて、そして…

「ういなあ…」

そんな様子を憎むような眼差しの少女が、鏡の前に一人。

“あんな形式化された典型的な安舞台ドフラマに羨望の念を抱けるなんて、君はつくづく単純だな。”

とんでくる皮肉に、結構ですよ、とばかりに、彼女はそっぽをむきます。

“そのシンプルさは君の取り柄だと思うけど。ところで、なんで彼らに憧れる。君は恋がしたいのか？”

「もちろんです！だって素晴らしいことだわ！」

興奮した様子で、揺れる金砂の髪。

“未体験なものの評価をそこまで断定できる君の判断能力が恐ろしいが…。私の知る限り君は他人と接したことなどない筈だろう。”

彼女の知る限りでもありません。

「でも、人と分かり合えることを前提とした心の動きなんてすごいと思いませんか！」

期待に輝く瞳。

その輝きを案じるような姿なき声。

“愛情や恋慕は、人間に付加してしまつた感情余分な機能だ。せつかくの君がそんなにも余剰ニセモノを求めるなんて、哀しいことだね。分かっているとは思うけど…。”

珍しく言葉を切ります。

声の言いたいことを察した少女は、うんざりしたような表情で、

「分かっています。もとよりそんな気はありません。誰だって自分の命が一番大事。

あなた風に言うのなら、それが生命の自己保存働いた機能なのでしょいう？」

そう、声も知っていたし、彼女も知っていました。

世界を俯瞰できる窓があるのに、鏡を見続ける理由。

なぜなら少女は外界を視界に収めるだけで、死んでしまうのですから。

崩壊は、割とあっさりしたものでした。
塔の外を往く銀色の一騎。

それは地上を流れる星の如く。

苛烈な光を放ち駆け抜けていきます。

その赫突に目が眩み、

少女は反射的に、窓に駆け寄っていました。

躊躇する余裕も、

声が制止する間もありません。

本当に一瞬の、けれどとても長かった時間。

求め続けたものを、ようやく手に入れた、その

——瞬間。

突然の破滅の音に驚いて、彼女は振り向きません。

織物の破片は宙を舞い、あんなに大事に思っていた鏡は砕けて、部屋は天井から崩れ

落ちていきます。

“自己を破壊する行為をあんな簡単に行うなんて、やっぱり君は私が嫌悪すべきものだった。”

蔑む声は既にかすれていて。

それを聞いて少女は、下を向くしかありません。

ここが壊れるということは、彼女が死ぬということ。

それは同時に、声かれの消滅死も意味していました。

そのことに、ほんの小さく後悔して。

もう、ほとんど聞こえなくなりながら、

“どうだい？君が憧れていた世界とやらは、命を潰してまで手に入れる価値があるものだったのか？”

声かれは、笑うように、眩みます。

その言葉に。

上げられた瞳は決然と。

堂々とした歩みで、彼の最期に応えていく。

たとえ自分が、彼との別れを惜しんでいても。

たとえ彼が、自分を恨むことになろうとも。

少女はあの決断を、あの瞬間を、悔いることはない。

焦がれ続けた世界へと。

自分のために。彼のために。

求め続けた世界へと。

一步を踏み出す。

その瞳には、まだ、あの

——瞬間。

目に飛び込んだその全てを、彼女は忘れることはないだろう。

夜が明ける。

その、祈りのような風景。

ああ、思っていた通りだ。

やっぱり、この世界は。

美しく、ただ、美しく……

どうでもいい話ではあるが。

私は生まれつきの破綻者だ。

他の生命たしやと関わり、独自のコミュニケーションを形成し、種の存続と繁栄を目的とするのが生命の定義だというのなら、他の生命それらに何の関心も持てない私は、確かに生命いのちではないのだろう。

物心ついてからそんな自身の欠陥（というべきか）に気づいていた私は、それでも自分は生命いのちなのだと思いたくて、様々な手段、工夫を試してみたが、結局どれも失敗続きだった。

だが、私は諦めなかった。否、諦められなかった。

こんな自分でも、この地に生まれついたのには、何かしらの意味があると信じたくて、それを探し求めた。

求めて求めて、求め続けて。

最終的に、一つの結論に達した。

私は、完全なものが好きなのだ。

完全。

言葉にするといやに簡単に寒々しく聞こえるが、そんなもの、この世界には存在しないだろう。

動物、植物の類は知性を持っていない時点で粗野で乱暴だし。

たまたま、それを持ち合わせていた人間は、感情を持っていることで、更に暴力的だった。

他者と接するとき、人間は多かれ少なかれ、心情の揺らぎが発生する。

分かり合える筈など無いのに、それでも理解し合おうとするその滑稽さ。

それで、自身が変わってしまうこともあるのだから、全く無駄なことだ。

せっかく高機能なのに、いらぬものも無分別に付属しすぎたせいで、その在り様を複雑で脆弱なものに落とし込んでしまっている。

全く、訳が分からない。

ああ、ならば。
この世で、最も完全なのは。
他を憎らしいとも愛しいとも感じることはない、
自分なのかもしれない。

そんな私が彼女に興味を持ったのは、当然といえば当然だった。
何しろ、ほとんど完全なのだ。

高い塔の中に閉じ込められた、一人の少女。

金砂のようにきめこまかく、美しい髪。

百合のように細く、白い手足。

ブルーに輝く瞳は、まるで青宝玉サファイアの如く。

それは、人々の美意識が象られたもののように。

それゆえに、人ではないようだった。

彼女はどこぞの姫様らしい。

塔から出ることではできないらしく、日がな一日閉じこもっては、機織りと歌を謳うことしかしなかった。

織りなされた布は、荘厳なメロディーさながらの流麗な輝きで。

紡がれた歌は、色彩的鮮やかさをもって耳に響き。

どちらにせよ創造者の在り方をそのまま写し出したものだった。

そんな彼女に私は何度も話しかけた。

他人と接する、という行為は何分慣れていなかったで、ひどくぎこちないものだった。

だが、彼女はよく応じてくれた。

だが、それは当たり前のことだったのかもしれない。

なにしろ彼女は、ほかに話し相手がいなかったのだ。

会話は大半が皮肉の言い合いのような、意味のないものだったけれど。

私には心地のいいものだった。

けれど、彼女には困ったことが一つあった。

部屋に備え付けの鏡を通して見る、外の世界が大変お気に入りなのだ。

世界そこにあるどんなものよりも価値がある織物や歌を創る彼女はしかし、そんなものは退屈くりかえしな日常の産物にしか思えないらしく、日々鏡の中で起こるつまらない些事を熱心に語り聞かせた。

なぜ何よりも単純でまっすぐなものが、なによりも複雑で怪奇なものに憧れるのか。窓から直接外を見てはいけしないと、私は何度も忠告した。

そうすれば彼女は死んでしまうと、なぜだか知っていたのだ。

それを聞く度に、彼女は、またか、といううんざり顔で、渋々機を織り続けた。

しかしながら。

幼い好奇心というのはつくづく理不尽で。

押し止めることなど、土台無理な話だったのである。

崩壊は割とあっさりやってきた。

早かったとも言えるし、遅かったとも言える。

ただ一つ確かなことは、この破滅は避けられなかった、ということだけ。

輝く騎士はきっかけに過ぎなかったのだ。

年月をかけて織り上げた自身の作品は弾け飛び、外界との唯一の接点だった鏡は割れて、文句ばかりだった、けれど慣れ親しんだ部屋が崩れゆくなかで、少女は青ざめた顔で俯いていた。

私も自身の存在が薄れていくを感じながら、最後に彼女を蔑んだ。

それは、あるいは惜しんだのかもしれないが、

どちらにせよ無駄なことに変わりはない。

全く。

私は無意味なものを、あんなにも嫌っていたというのに。

——瞬間。

視線を上げた少女の、その眼差しを、私は忘れることができないだろう。

顔色は蒼白で、口を一文字に結び、ひどく無表情だったけれど、その瞳は不屈を訴えていた。

後悔なんてしないと。
ただ、世界の一端に触られた喜びだけを発散させて。
そうして彼女は歩き出す。自らが求め続けたものへと。
出来ない私には目もくれない。それも当然だろう。
なぜなら。
何かを失いたくない、と思うことが愛なのならば。
私は既に、彼女に恋をしていたと言えるのだから。

アーサー王研究会創作文庫

ふたり

著者 有佐 隆

2014年 1月 15日 発行

発行人 不破有理

発行所 慶應義塾大学教養研究センター

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

慶應義塾大学来往舎1階 代表 045-563-1151

©2014 ARISA, Ryu Printed in Japan

非売品

